

「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」

最終報告

資料6 文科省はどうだったか

学校管理下で校庭にいた9割以上の子どもが亡くなったことをなぜ重く考えなかったのか。文科省の姿勢は問われるべき。

検証委員会では終盤「事故から2年近く経ってからの検証」を何度も言い訳にしていた。事故直後から積み重ねられた記録、情報を活用していない。むしろ明かな事実を曖昧にってしまった。なぜ2年もほったらかしだったのか。文科省が方針の中に「東日本大震災で学校管理下で犠牲を出した事例の検証」をあげたのは24年9月。大川小の遺族らからの訴えでようやく動いた。

23年7月に始まり、24年7月に最終報告をまとめた「東日本大震災を受けた防災教育・防災管理等に関する有識者会議」では第1回と第7回で少し話題になっているだけ（議論はなし）、報告書には「大川小」に関する記述は見られない。

《第1回議事録より》

【藤岡委員】・・・一方、大川小学校の場合は、まさか5キロも離れたところで、しかも非常に近代的な建物ですが、あれが2階建てだったんですね。ですからおそらく、先生方がいろいろ言われることはあるんですが、その校舎にとどまっておいたほうがよかったのか、避難したほうがいいのか、非常に判断が厳しかったところじゃないかなと思うんです。あれがもしもう1階建物があれば、大川小学校はもうちょっと、ここまでならなかったかなと思ったりもします。

第1回ではこのように校舎の問題として発言があったが、その後議論なし。

.....

【渡邊座長】 残り少なくなっただんですけど、関口さんのほうで何かございますか。

【関口委員】 非常に貴重な3人の先生方のお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。

私も大川小学校とか実際に行ってみただんですけども、やはりなぜ裏山に駆け上がらなかつたんだろうというのがありまして。で、ちょっと谷山先生に教えていただきたいんですけども、戸倉中学校では何か学校からがけの上に逃げたということだったんですが、そこは避難路とかは整備されていて、地震が起きたらそこへみんな避難しようというような想定になっていたんでしょうか。

会議の終盤、一言だけ「なぜ裏山にかけあがらなかつたんだろう」とあるが、議論にならず。

《第7回議事録より》 簡単に住民のせいになっている。

【矢崎委員】

・・・・・・ 大川小学校の写真、幾つか映像をごらんになりますけれども、5月と9月の違いです。それからこれは航空写真と地図です。それからこれが被害の直後の全景と学校のところ、これは大川小学校は、皆さんご承知のように、津波が石巻湾から来たのと北上川を遡上したのと両方が

・・・北上大橋のところ、ここのところですよ、ここでちょうど子供たちが避難したときに、ここで津波に遭ってしまったということですね。大川小学校のこの51分間の悲劇なんですけれども、先生方が外に出て、子供たちを校庭で避難をさせていた。そこに町会の人たちが来て、絶対にここには津波なんか今まで来たことないんだよと、そういうお話で、かなり先生方の判断が迷ったということですね。それで結局51分間の悲劇で、結局避難したんだけど、先ほど言ったように、海から来たのと、それから川を遡上してきたのと両方に襲われてしまって、津波にのみ込まれてしまったということですね。

ここで学校として何が大事かということですね。教訓は、学校は最悪のことを想定して、行動しなきゃならない。これは危機管理の鉄則なんだという、そういうことは、これかなり学んだことじゃないかなと思います。

それから、いろいろと議論があって、引き取りをさせた子供が助かった、または引き取りをさせた子がかえって津波にのまれちゃった、どっちがいいんだと。釜石の奇跡のようなことを考えたり、それから中浜小学校のことを考えたりすると、かえって引き取らせたら危ないよと、学校にいて、きちんと避難したほうが安全なんだという、そういう何か議論が多いと思うんですけれども、実は釜石はその逆だったわけですよ。子供が避難していたり、また避難行動をしたときに、強引に親が車で大津波警報を、ぴしっと、親が車でば一つと引き取っていった子供、その子供たちが助かっているわけですよ。だからどっちがいいということは、これはなかなか言えない問題だなということ、これからわかります。

これは大川小学校の裏山ですこれは女川町の、これも飛ばします。

渡邊座長】 ありがとうございます。

ただいまの矢崎委員からのご説明につきまして、何かご質問とかございますでしょうか。よろしいでしょうか。 (※質問、意見なし)

他の事例（助かった事例）は膨大な資料が準備され、時間をかけて議論が交わされているが、救えなかった大川小の事例は深く関わろうとしない姿勢が明らかである。裏山の写真のスライドは省略同然。

《最終報告書より》

・ 小学校段階では、
低学年では、教職員や保護者など近くの大人の指示に従うなど適切な行動ができるようにする。中学年では、災害の時に起こる様々な危険について知り、自ら安全な行動ができるようにする。高学年では、日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、自分の安全だけでなく、他の人々の安全にも気配りができるようにする。

大川小の子ども達は災害の危険を理解していたし、先生の指示に従っている。このような提言はありえない。大川小で犠牲になった子どもを抜きに考えている。